

エズラ・パウンドの「原語主義」

The Japan Times 寄稿記事に見るフェノロサ草稿の発展

長畑 明利

1 .



1910年代に、Ezra Pound が能と漢詩の翻訳（翻案）に関わったことは、今ではよく知られているが、その経験を彼は後の人生において何度か振り返ることになる。本稿はその一例として1939年～40年に *The Japan Times* に寄稿されたエッセイに注目し、そこに見られる10年代の能・漢詩の翻訳経験の発展と、パウンドの翻訳および外国語についての態度を紹介・検討するものである。

はじめにフェノロサとパウンドの能および漢詩の翻訳の概略を振り返っておくことにする。¹⁾ パウンドが育った19世紀末はジャポニスムやシノワズリが流行した時代であり、パウンドも自身翻訳に関わる前に、すでに東洋の文学に関する情報に触れていた。例えば彼は、渡英後の1909年3月に、友人の Laurence Binyon による“Oriental and European Art”という講演を聴いているし、同年、Cafe Tour d’Eiffel における T. E. Hulme や F. S. Flint らの集まりにおいて、日本の俳句のことも聞いている（Kodama, *American Poetry* 59）。1911年には詩人の Yone Noguchi からの手紙も受け取っている（*EPJ* 4）。²⁾ しかし、パウンドが東洋の文化と決定的な出会いをしたのは、1913年に、ロンドンで Ernest Fenollosa の未亡人 Mary に会ったときだと言える。これをきっかけに、彼女は夫が手がけた能と漢詩の翻訳の遺稿をパウンドに託し、その完成を依頼したのである。

言うまでもなく、フェノロサは明治時代に日本に招聘された、いわゆる「お雇い外国人」の一人である。マサチューセッツ州に生まれた彼は、ハーヴァー

ド大学を卒業後、1878年に日本を訪れ、東京帝国大学で政治学や経済学（理財学）などを教えた。その傍ら、彼は日本美術への関心を深め、廃仏毀釈の風潮の強いこの時代に、助手の岡倉覚三（天心）とともに、日本古来の美術品保存のために努力し、また、東京美術学校（後の東京芸術大学）の設立に尽力した。さらに彼は、（初世）梅若実（初世）に能を習い、また、東京帝大で教えていた森槐南の講義を通して、漢詩についても学習した。それらを英語圏の人々に紹介するために、彼は能と漢詩の英訳を試みた。日本語が堪能であったわけではないため、彼は弟子筋にあたる平田喜一（禿木）や有賀長男の助力を得て、翻訳を進めたが、結局、それらを完成させることなく、1908年、ロンドン訪問中に死亡した。残された夫人のメアリは、紆余曲折の後、紹介者のつてで会ったパウンドこそが夫の翻訳を完成させるにふさわしい人物であると判断し、彼にフェノロサの遺稿を送り、翻訳の完成を依頼したのであった。

パウンドもまた、当時、日本語と中国語ができたわけではない。しかし、メアリがパウンドに期待したのは、翻訳で用いられる言語を詩的なものにする事だった。「アーネスト（フェノロサ）が望んだかたちでこれを完成させることができるのはあなただけです」とメアリはパウンドに伝えたという（Carpenter 220）。こうして、1916年にパウンドは、訳稿のうち「錦木」「羽衣」「熊坂」「景清」の4編の英訳を収録する *Certain Noble Plays of Japan: From the Manuscripts of Ernest Fenollosa, Chosen and Finished by Ezra Pound, with an Introduction by William Butler Yeats* を出版し、さらに同年、15編の能の英訳と、能についての解説を収録する *'Noh' or Accomplishment: A Study of the Classical Stage of Japan by Ernest Fenollosa and Ezra Pound* を出版した。

フェノロサの訳稿との関わりによって、パウンドもまた能に関心を持つことになった。翻訳を完成させる過程で、彼は急速に能への関心と理解を深め、その影響のもと、1916年には、自ら数編の戯曲も書いている。これらの戯曲が彼の生前に発表されることはなかったが（1987年に *Plays Modeled on the Noh* として出版）、例えばそのうちの一編“Tristan”は、パウンドがパウンドなりの方法で、能を模倣していることを示している。³⁾ また彼は、当時同居して、自ら秘書役を務めていた W. B. Yeats にも能のことを教え、その結果、イェイツもまた *At the Hawk's Well* をはじめとする能を模倣した戯曲を書くことになった。

一方、パウンドは能に続いて、メアリから漢詩の訳稿も受け取った。フェノ

ロサは森槐南に学んだ漢詩について、上述の平田と有賀の助力を得て、その試訳をノートに書き連ねていたのだが、そのノートは、漢字の下に日本語のローマ字表記によるその読みを書き、その下に個々の漢字の意味（英訳）を書き、そしてさらにその下に、1行単位の意味を書くという体裁のものだった。（漢字が書き取られていないものもあれば、日本語読みの発音が示されていないものもある。また、漢字の偏と旁のそれぞれの意味を+記号を挟んで並べたものもある。）パウンドはフェノロサのノートに残された、このいささか読みにくい訳稿を用いて、漢詩を自分なりの詩に翻訳（翻案）した。そして1915年に、これらの詩18篇を集めた詩集 *Cathay* を出版した。

こうした概略が示すように、パウンドの能と漢詩の翻訳（翻案）は、日本に滞在してそれらを学んだフェノロサ、彼に知識を授け、翻訳を助けた梅若、森、平田、有賀、さらに、フェノロサの死後、遺稿の橋渡しをした未亡人メアリをはじめとする、文化の境界を越えた人のつながりによって可能になったものである。国際的な言語文化交流の一例と言ってもよいだろう。

2 .

日本を相手にしたパウンドの国際的言語文化交流は、しかし、1910年代に途絶えたわけではない。⁴⁾ これもよく知られているように、1936年にパウンドは、日本の詩人北園克衛からの手紙を受け取り、両者の文通が始まる。⁵⁾ この時期、イタリアのラパッコに住んでいたパウンドは、徐々に発表媒体を失い、また、経済的にも困窮しつつあった。第二次大戦は間近に迫り、アメリカとイタリアの往来は困難となり、英語の出版物も徐々に入手困難となっていた。生活のため、パウンドはイタリアで、またアメリカで、教職の道を探すが果たせず、発言の場も失われた彼は、北園に雑誌寄稿の仕事がないかを尋ねる（1937.10.23 北園宛書簡、*EPJ* 47）。北園の尽力の結果、パウンドは1939年5月から *The Japan Times*⁶⁾ への寄稿を始めることとなり、1940年9月まで、都合12点の記事を書いている。それらの掲載時期、タイトルを次に掲げる。⁷⁾

(1) 1939年5月15日 “Tri-lingual System Proposed for World Communications”
(*EPJ* 150-152; *PPCP* 7.450-451)

(2) 1939年6月5日 “Death of Yeats: End of Irish Literary Revival” (*EPJ* 152-154;
PPCP 7.453)

- (3) 1939年12月10日 “Study of Noh Continues in West” (*EPJ* 154-157; *PPCP* 7.474-475)
- (4) 1940年1月8日 “An Ezra Pound Letter from Rapallo” (*EPJ* 158-161; *PPCP* 8.2-4)
- (5) 1940年3月4日 “From Rapallo: An Ezra Pound Letter” (*EPJ* 162-165; *PPCP* 8.14-15)
- (6) 1940年4月18日 “From Rapallo: An Ezra Pound Letter” (*EPJ* 166-169; *PPCP* 8.31-32)
- (7) 1940年6月13日 “From Rapallo: An Ezra Pound Letter” (*EPJ* 169-172; *PPCP* 8.43-44)
- (8) 1940年7月22日 “Letter from Rapallo: In War Appear Responsibilities” (*EPJ* 172-176; *PPCP* 8.51-53)
- (9) 1940年8月12日 “From Rapallo: An Ezra Pound Letter” (*EPJ* 176-180; *PPCP* 8.62-63)
- (10) 1940年8月26日 “From Rapallo: An Ezra Pound Letter” (*EPJ* 180-186; *PPCP* 8.66-69)
- (11) 1940年9月2日 “From Rapallo: An Ezra Pound Letter” (*EPJ* 186-189; *PPCP* 8.73-74)
- (12) 1940年9月29日 “From Rapallo: An Ezra Pound Letter” (*EPJ* 189-191; *PPCP* 8.77)

これらの記事のうち、(1)～(3)にはその内容を表すタイトルが付されている。(1)は、以下にさらに詳しく見るが、異なる文化圏相互のコミュニケーションのための提言を内容とする記事であり、“Noted Scholar of Noh Suggests Bilingual or Trilingual Edition of Hundred Best Books on Japanese Literature” という副題がついている。(2)は1939年1月の W. B. Yeats の死と彼が関わったアイルランド文芸復興を紹介するものである。(3)も以下で論じるが、能に関する資料の保存を促す記事であり、“Pound Outlines New Approach to Drama Using New Media” という副題がつけられている。

(4)以後の内容についても簡単に触れておく。“Annual Music Week Proposed to Introduce Each Year Insufficiently Known Composer” という副題のある(4)は、パウンドがオルガ・ラッジらとともに毎年開催していた「音楽週間」の紹介と、

彼らがそれまで忘れられていたヴィヴァルディへの関心を復興させたことを紹介するものである。(5) は混乱の中にあるヨーロッパについての有益な発言が



できるのは日本人だと主張する記事である。(6) は Jean Cocteau、Basil Bunting、Ronald Duncan ら自分よりも年下の詩人を紹介する記事である。(7) は “Why There Is a War in Europe” という副題をつけられた記事で、金融資本と戦争の関係をめぐる自身の考えを披瀝するとともに、銀行が紙幣を発行する権利を持つことを批判するものである。(8) はタイトルに示されているように、戦争における責任についての見解を述べつつ、戦争が金融資本に富をもたらすために引き起こされるという自身の主張をあらためて提示し、また、アメリカ

はかつてのモンロー主義に立ち戻って、そのような戦争に加わるべきでないと説くものである。この記事では、寄稿開始当初の落ち着いた文体は影を潜め、激情を迸らせたかのような強い口調で書かれている。なお、タイトルは 1938 年に出版された Delmore Schwartz の作品集のタイトル *In Dreams Begin Responsibilities* を踏まえるか、揶揄するものと考えられる。(9) は再び、戦争の背後に金融資本による不当な利潤追求があることを告発するとともに、そのことを報道しないメディアを批判する記事である。ここでは、自説の正しさを知るために、歴史家 Brooks Adams の著作 (*Law of Civilization and Decay* と *The New Empire*) を繙くことを読者に勧めている。冒頭には、アメリカからの郵便物がラパックに届かなくなっていることを示す文もある。(10) はいささか構成の混乱した記事であるが、世界文学の研究の成果を公表するためのアンソロジーの企画を日本で推進できないかという提案がなされ、共作や翻訳についての意見が示される。また、正しい経済観を育むためのパンフレット案も差し挟まれている (John Adams、Jefferson、Lincoln、合衆国憲法からの引用からなる)。(11) は再び、現在のヨーロッパ情勢を知るために必要な知識として、経済に関する自説を展開する記事である。東洋は西洋のように、政府が金融資本に支配されていない、あるいは、枢軸国側は金融資本の usurious な行いを廃するために戦争を行っているのだという発言もある。また、彼のものと近い経済理論を展開する書物として、Odon Por の著作を挙げ、そこで示される

autarchy という考えを紹介している。(12) は *The Japan Times* に掲載された最後の記事となった文章だが、複数のトピックについての断片的なコメントをつなぐ構成となっている。その中には、国際連盟などの組織の（パウンドから見た）腐敗を知る松岡洋右の外務大臣就任を喜ぶくだりなども含まれている。

このように、日本の英字新聞へのパウンドの寄稿文は、1930年代後半のヨーロッパおよびアメリカをめぐる国際情勢を色濃く反映するものであり、また、とりわけ上記(7)以後は、1920年代以後顕著になるパウンド自身のファシズムへの傾倒と、金融資本のモラルなき利得追究およびそれらの戦争との関係をめぐる彼の強迫的とも言える想念を、包み隠さず展開する文章となっている。⁸⁾しかし、(1)~(4)や(6)に示されるように、日本人の知識人に宛てて書かれたとおぼしきこれらの英文には、かつてフェノロサの訳稿をもとに取り組んだ能と漢詩の翻訳の回顧、そしてその作業を通じて育まれた日本および東洋文化への敬意、さらには、異文化理解、比較文化、世界文学、そして翻訳についてのパウンドの思索が、多くは断片的な形ではあるものの、披瀝されている。とりわけそこには、フェノロサの訳稿の再評価と、言語を異にする異文化理解のあり方をめぐるパウンド自身の態度が書かれており、注目に値する。

3 .

パウンド自身が関わった能と漢詩の翻訳への言及とフェノロサの訳稿に対する注意喚起は、北園との文通においても頻繁に見られるものだが、1939年~40年の *The Japan Times* 寄稿文では、それらは特に、上記の(1)と(3)に顕著である。まず(1)においてパウンドは、後述のように、「世界のコミュニケーション」のために日本（もしくは日本の組織）が行うべきこととして、3つの提言を行い、その2番目として、次のように述べている。

第二に、能のすべてを映像化すること、あるいは、ともかく、謡のうち最も優れたものをサウンドトラックに残すことは可能であろう。日本の映画『ミツコ』を観て、私はノスタルジアでいっぱいになった。パリで久米民十郎の友人たちが私に能の断章を歌ってくれてから15年になるが、ここラパッドで（質素な田舎の映画館で）あの残念なほど短い[能の]再生を耳にしたとき、私は瞬時にそれが何かわかった。日本の能は、我々西洋人が持ついかなるものとも異なる宝である。我々にも名作がある モーツァルト、パーセル、ジャヌカン、

ダウランド。しかし、能は異なる名作であり、一方が他方の代わりになるわけではない。(EPJ 150)⁹⁾

すべての能を映像化すべきである、あるいは、謡のうちもっとも優れたものを録音すべきであるという主張は、その約7ヶ月後に紙上掲載された(3)において、さらに具体的に述べられることになる。そこではこれらの提案が30年前のフェノロサの試みと明確に結びつけられている。“Study of Noh Continues in West”と題されたこのエッセイの冒頭で、パウンドはまず、「アーネスト・フェノロサによって始められた東洋と西洋のよりよい理解のための仕事はまったくもって終わってはいない」(EPJ 154)と述べる。そしてさらに、フェノロサが「日本の諸価値をより積極的に保存する必要性」に関して日本の友人たちを覚醒させたものがどのようなものであったにせよ、それは「彼の未編集の草稿によって発火させられた火花」を背景にするものでなければならない、と言う。フェノロサへの敬意を示す、こうしたいささかレトリカルな表現に続いて、彼は能の保存に関するより具体的な提言をする。彼は「西洋の我々は、すべての能の二カ国語もしくはそれ以上の言語で書かれた大きな瑕疵のない版がほしい」(EPJ 154)と述べ、さらに、少数の者は、1ページに漢字のテキストが印刷され、その「書としての美と基本的に翻訳不能である漢字そのものの価値」(EPJ 154)を伝えてくれる版を望んでいると言う。記事の後半に至ると、さらに、原典を片側ページに、とりわけ漢字を大きく印刷し、見開きページに英語による語釈と解説のある版が望ましいとも書いている(EPJ 155)。そして、能の保存を実現するための技術として、彼は「サウンドフィルム」と「マイクロフォトグラフィー」を提案する。つまり、音声付きのフィルム撮影とマイクロフィルム化である。アメリカ訪問中、議会図書館で、『葵の上』のフィルムを観たパウンドは、それらはフェノロサの時代にはなかった技術だが、今では、毛筆で書かれた能の台本を写真撮影すれば、それを少額でマイクロフィルム化することが可能であると言う。¹⁰⁾

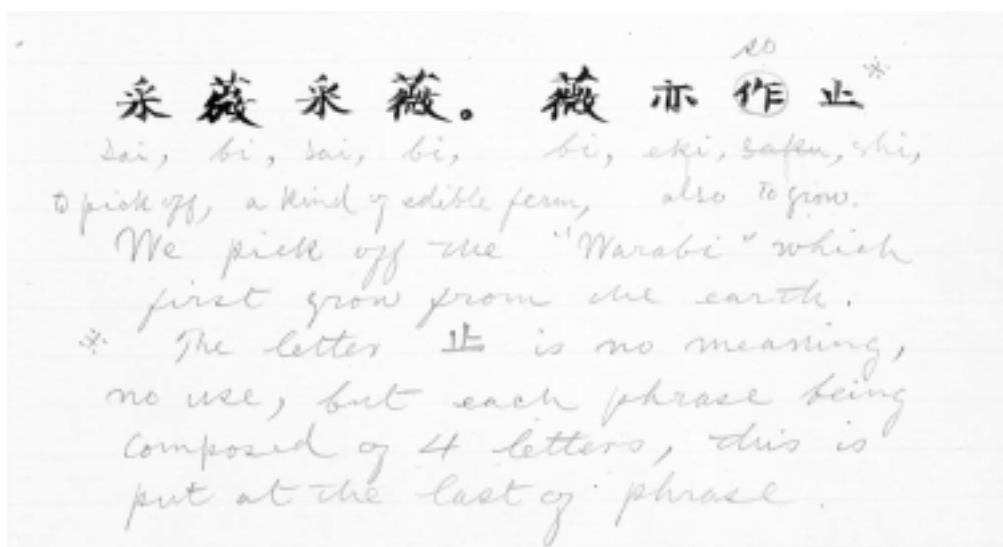
パウンドは同じ(3)で、能の二カ国語版で使われるべき翻訳言語についても言及している。彼は、どれだけ退屈で詩的ならざるものであっても、注と解説のついた逐語訳は必ず必要であると主張し、それに加えて、詩的価値のある、可能な限り最高の翻訳があるべきだと言う(EPJ 155-156)。その一方で彼は、能の翻訳においては翻訳者に適度の自由が認められるべきであるとも言い、最

後に、こうした能紹介の試みが、すでに『船弁慶』の上演を企画した「国際文化振興会」¹¹⁾によって始められていることを告げている。

4 .

パウンドの能の保存の提案がフェノロサの能と漢詩の翻訳の試みの延長線上にあることはこれらの言葉から明白だが、その二カ国語版の構想は、スタイルの面でも、30年前のフェノロサの試みを反復するものである。上で紹介したように、(3)の記事の冒頭で、パウンドはフェノロサの翻訳の意義を「未編集の草稿によって発火させられた火花」と呼び、「東洋と西洋のよりよい理解のための仕事」として位置づけていた。パウンドの能の二カ国語版構想はその実践であるが、彼はそのフォーマットとして、原語テキストおよびその注と解説に加え、逐語訳と優れた翻訳の両方を含めることを提案していた。それはまさに、フェノロサの(能というよりは漢詩の)翻訳草稿(「未編集の草稿」)のフォーマットを反復するものにほかならない。

上述のように、フェノロサが残した漢詩の翻訳の草稿では、まず原詩の漢字が横書きで書き取られ、その下にその日本語読みに基づく発音がローマ字表記され、そのそれぞれの下にその漢字の意味(英訳)が書かれていた。そしてそのさらに下に、それらの個々の漢字の意味をつなげた1行単位の意味が書かれていた。例えば、「采薇」(作者不詳)翻訳のためのフェノロサのノートの場合、その1行目は次のようになっている。¹²⁾



so

采 薇 采 薇。 薇 亦 作 止

Sai, bi, Sai, bi, bi, eki, ~~Saku~~, shi,

to pick off, a kind of edible fern, also to grow

We pick off the “Warabi” which

first grow from the earth.

The letter 止 is no meaning,

no use, but each phrase being composed of 4 letters, this is

put at the last of phrase.

つまり、フェノロサのノートのフォーマットの基本は、原語（漢字）+その日本語のローマ字表記による読み+個々の漢字の逐語訳+行単位の訳の4項目である。その基本形を、パウンドは彼がそれに触れた約30年後に、能の二カ国語版の構想において反復、もしくは、発展させようとしているのである。実際、*The Japan Times*の記事には現れないが、1937年11月2日付の北園宛書簡では、彼はそのような二カ国語版における表記の例として、次のようなものを提案している（EPJ 49）。

nowt	莫
red	赤
not	匪
fox	狐
nowt	莫
black	黒
not	匪
crow	烏



これは漢字を縦に一列に並べ、その左側に個々の漢字に対応する英単語をやはり一列に並べるフォーマットである。これに加え、パウンドは同じ書簡で、これらの漢字と英単語のさらに横、もしくはページの下に、説明注を印刷することを提案している（*EPJ* 49）。漢字＋その逐語訳＋説明注というこの表記のスタイルは 漢字のローマ字表記と行単位の訳の表記を欠いているとはいえ フェノロサのノートのそれを模したものと言ってよい。¹³⁾ そして、それはさらにこの後、『詩篇』において、特に「中国詩篇」以後の詩篇において、様々な形で反復されることになるのである。例えば、「詩篇 77」末尾には、漢

字＋各文字の訳＋行単位の訳からなる漢字解説がある（左図、*C* 496）。ここにパウンドのフェノロサへのオマージュと、自身が関わった翻訳作業の回顧があることは確かだが、この形式上の模倣は、パウンドの おそらくはフェノロサ草稿に基づく翻訳を通じて育まれた 詩についての見解と、異言語に対する態度を示すものでもある。すなわち、「原語主義」と詩における視覚と聴覚の重視である。

5 .

能の二カ国語版出版とフィルム化を説くパウンドの姿勢には強い「原語主義」が窺える。例えば、(3)における能の二カ国語版の具体的構想の一つは、片側のページに原テキストを、それと向かい合うページに英語（もしくはその他の言語）による注と解説を印刷する見開き版であるが、そこに見られる考えは、日本語（もしくは中国語）のテキストは、西洋人が母語あるいは自身に理解可能な言語で容易に理解できるような翻訳ではなく、原語をとどめ、限定的な語釈と解説を与えられたテキストによって受容されるべきだというものである。彼はその一方で、「可能な限り最高の翻訳」を掲載すべきであるとも言い、翻訳者に一定程度の自由が認められるべきだと言うのだが、その理由も実はオリジナルの特質を伝える（“convey the feel and the aroma of the original play and

of the inter-relation of characters” [EPJ 156]) ために必要だというものである。また、そのような自由な訳とは別に、逐語訳は必ず必要であるとも主張している。

パウンドのこうした「原語主義」もしくはオリジナル表記への執着は、北園に宛てた書簡にも頻出する。例えば、1936年11月24日の書簡では、北園が主宰する雑誌 *VOU* の詩人たちの情報を求めつつ、作品の英訳に加えてその翻訳を「修正したり、よりよいものにしたりするために」(EPJ 34]) オリジナルのコピーを送るよう求めているし、1937年3月11日付の書簡では、北園から送られてきた *VOU* 関係者の詩が翻訳だけで、オリジナルを含んでいないと言っている (“I would like to see the originals if they are written in ideogram” [EPJ 41])。1938年2月9日付の書簡では、再び、翻訳を送ってもよいが、そのそれぞれにおいて、個々の漢字の説明がほしい 「フェノロサの漢字論の私の版に印刷された詩のように」(EPJ 56) と書き、1938年5月14日付書簡では、さらに、「西洋人が漢字を学ぶ正しい方法は、ページとページ、もしくは、行と行の間に挿入された虎の巻による」(EPJ 63) と述べるとともに、マイクロフィルム・リーダーの利用により、「漢字と日本語で書かれた最高の文献 100 冊をオリジナル版で入手することがはるかに容易になるはずだ」 (“That ought to accelerate the availability of the 100 best ideogramic and Japanese texts IN THE ORIGINAL.”) と主張している (EPJ 56)。また、1940年11月5日付の書簡では、*VOU* に毎号ローマ字表記で少なくとも 1 篇の優れた詩を掲載せよと言い、その際、漢字の記載は絶対に必要であると述べている (“At any rate I NEED ideogram. [...] BUT I also need sound and phonetics [EPJ 103])。

The Japan Times 寄稿記事に戻れば、パウンドの「原語主義」は翻訳のみならず、さらに広く、国際間の言語使用に関する発言にも見て取れる。すでに述べたように、パウンドは最初の寄稿記事 (“Tri-lingual System Proposed for World Communications”) において、国際文化振興会に対する 3 つの提言を行っている。その第 1 は、「日本語と表意文字 [漢字] で書かれた文学の最も優れたもの 100 冊の二カ国語もしくは三カ国語版」の出版である (EPJ 150)。¹³⁾ パウンドは、ライカの grainless film とマイクロフォトグラフの技術を使えば、それらの版は商業化可能であり、見開きの二カ国語版であるローブ (Loeb) のギリシャ語・ラテン語叢書と同程度の価格で本を作ることができるという。この提言は、(3) で述べられる能の二カ国語版の構想と同種のものである。パ

パウンドの提案の第2は、すでに紹介した能の映像化である。提案の第3は、記事の見出しにも用いられている「世界のコミュニケーションのための三カ国語システム」である。パウンドは、エスペラントをはじめとする普遍言語の試みはうまくいっておらず、また、Ogden の「ベーシック・イングリッシュ」の提案には発展の余地があるが、オグデンにはそれを実践するための手際の良さや人間性が欠けていると言いき、それゆえ、最も望ましいのは「日本語の読みを加えた漢字とイタリア語と英語の三ヶ国語システム」だと言いき。

パウンドは、自分が提案する三カ国語が中国語（漢字）と英語とイタリア語であること理由として、世界の多くの人々が英語を話すこと、中国と日本で漢字が用いられていること、イタリア語はラテン系言語のうち最も単純なものであることを挙げ（*EPJ* 151）、さらにイタリア語に関しては、人工言語のいかなるものも、それを他のラテン系言語よりもはやく習得できるわけではないこと、スペイン人はイタリア語をほとんど瞬時に理解すること、ラテン語を学んだ者は数週間でイタリア語を学ぶことができることを述べている（*EPJ* 151）。

この「三カ国語システム」の主張は、その政治的意味合いを含め、多方面から検討されるべきものではあるが、本稿において確認すべきは、それが母語とは異なる言語の習得を前提とする提案であることである。能や日本語と中国語の文献の二カ国語版出版についての提言同様、パウンドはここでも、原則的に、異文化で用いられる言語（すなわち原語）から極力離れぬ姿勢を見せているのである。

6 .

パウンドのこうした「原語主義」への執着はどのように説明されるのだろうか。一つの観点は、彼の詩論における視覚面と聴覚面の重視との連続性である。¹⁴⁾よく知られるように、パウンドは 1929 年の “How to Read” において、3 種類の詩について語っている。一つは *melopoeia* であり、それは「言葉がその単純な意味を越えた何らかの音楽的特性に漲っていて、それがその意味に方向もしくはは方角を与える」詩であるとされる（*LE* 25）。二つめは *phanopoeia* であり、それは「イメージを視覚的想像力の鑄型に流し込む」詩である（*LE* 25）。三つ目は「知性の舞踏」と形容される *logopoeia* であり、それは「言葉をその直接的な意味のためだけに用いるのではなく、語法の様々な習慣や、我々がその言葉によって期待する文脈、つまり、通常その言葉に付随することがらや、容認

されると知られていることがらや、アイロニカルな遊戯を、特殊なしかたで考慮する」詩であるとされる（*LE 25*）。パウンドはこれらの3種類の詩の翻訳可能性についても触れており、彼によれば、「メロポエイア」は「鋭敏な耳を持つ人であれば、その詩の書かれた言語がわからぬ外国人でも味わうことが可能」だが、それを「一つの言語からもう一つの言語に移す、あるいは翻訳することは、神意による偶然でもないかぎり不可能であり、それが可能である場合でも、一度に半行までである」（*LE 25*）。これに対し、「ファノポエイア」は「ほとんど、あるいは完全に、そのままの形で翻訳することが可能である」（*LE 25*）。そして「ロゴポエイア」は「それが表現する心的態度は要約によって伝わるかもしれないが、翻訳は不可能である」（*LE 24*）。

詩の種類と翻訳可能性に関わるパウンドのこの説明に照らし合わせれば、パウンドが上記(3)で述べている能の二カ国語版についての見解も理解しうるものとなるだろう。パウンドが漢字を大きく印刷した原典を含む版を要求したことは、その視覚的要素を重視したからであり、イメージを視覚的想像力の鑄型に流し込む「ファノポエイア」は、言語の違いを越えて　つまり、対象とする言語が理解できなくても　伝達可能なものであるとする彼の考えを裏付けるものと言える。同様に、上記(1)における、能のもっとも優れた謡をサウンドトラックに残すべきであるという提言は、「その詩の書かれた言語がわからぬ外国人でも認識することが可能」であるが、「神意による偶然でもなければ」翻訳不能とする「メロポエイア」の説明を反映するものと言える。それはそのままの形で聞くほかないのであるが、一方、それは対象とする言語がわからない外国人でも味わうことができるのである。パウンドが、ラパッコの「質素な村の映画館」で瞬時に謡いを認識できたという逸話は、自分自身が「鋭敏な耳を持つ人」であることを仄めかしているとも取れる。

このように、パウンドが提案している能の二カ国語版の構想に見られる彼の「原語主義」は、翻訳によって異言語に移し替えることのできぬオリジナルの詩言語の「メロポエイア」と「ファノポエイア」としての性格を保持するための方策であることがわかる。パウンドは、能のテキストにおける直接的な、つまり、翻訳可能な意味を理解するだけでなく、その言葉に漲る視覚的、聴覚的要素をも同時に体験すべきであることを説いているのだと考えられる。そしてこのことこそが、これらの記事にたびたび現れるパウンドのフェノロサに対する敬意の内実でもある。パウンドが30年後に模倣したフェノロサのノートの

フォーマットこそは、原語テキストの視覚的特性と原語の発音、すなわち、彼が「ファノポエイア」および「メロポエイア」として解説した詩の特性を、言語の違いを越えて保持することを可能にするのである。

7.

パウンドの「原語主義」はこのように彼の詩論を反映するものであるが、その提案が彼の外国語に対する態度を示すものでもあることをここで再び確認しておいてもよいだろう。1934年に発表されたエッセイ“Cavalcanti”の末尾で、パウンドは翻訳について次のように書いていた。

結局のところ、翻訳者はおそらく言語的に怠惰な読者のための作業をすべて行う能力はないのだ。彼にできるのは宝のありかを示すことであり、どの言語を学ぶべきかの選択において読者を導くことであり、また、ある言語のわずかな知識を持ち、韻律上の注釈とともに原典を読むエネルギーを有するせっかちな学習者に、大いに実質的な援助を与えることである。(LE 200)

ここで説明されているタイプの翻訳をパウンドは「解釈的翻訳」(“interpretative translation”)(LE 200)と呼び、それは「翻訳者が全く新しい詩を作り出す」(LE 200)類の翻訳だと言う。しかし、本稿の文脈からすれば、重要なのは翻訳者の裁量、もしくは、創作としての翻訳ではなく、引用の最後に示されているように、「解釈的翻訳」が「注釈とともに原典を読む」ことを想定したものであることである。¹⁵⁾ パウンドの「原語主義」と「原典を読む」ことの重視の背後には、言語の障壁は外国語を学ぶことによって克服できるとする考えが見えるのである。実際、彼は、(3)の記事の中で、

振り返ってみれば、文化にはより多くの言語が必要であり、それを制限したいと思う者などいない。ギリシャ語、ラテン語、そして、望む限り多くの他の言語 どれも大変楽しい。(EPJ 151)

とも述べている。『エクソフォニー』における多和田葉子の言葉(多和田 47)をも彷彿とさせるこの発言には、パウンドが学部時代にラテン語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、プロヴァンス語、古英語、ギリシャ語

を学び、大学院ではロマンス系諸語と文学を研究し、1906年には修士号を取得したこと（Xie 204）を思い起こさせる。実際、彼にとって外国語の学習は苦痛ではなかったということがその原語主義と多言語主義のルーツにあると考えることは無理なことではないだろう。その外国語学習への積極的な姿勢が、フェノロサの能と漢詩の草稿に基づく翻訳の経験によってさらに強化され、またひいては、パウンドの後の文学スタイルと異文化に対する態度の決定に影響を及ぼした、と考えることも不自然なことではない。

パウンドのこうした原語主義と多言語主義は彼のコスモポリタニズムの現れとも見なしうる。しかし、この点で考慮に入れねばならぬのは、彼がしばしばコスモポリタニズムの対極と見なされるファシズムの信奉者であったことである。ファシズムが、国の伝統と固有の文化を賛美し、異質なものを排除するナショナリズムを包摂するのであれば、多言語主義およびコスモポリタニズムはこの性質から逸脱するものとも考えられる。しかし、パウンドの事例が示すように、多言語主義は必ずしもファシズムと相容れぬものではない。パウンドのファシズム関与と彼の多言語主義およびコスモポリタニズムの関係を論じるとは本稿の目的からは外れるが、学生時代の外国語学習とフェノロサ経由の能と漢詩の翻訳によって育まれた彼の原語主義・多言語主義が、1939～40年の*The Japan Times* 掲載の記事において復活したとき、それらがファシズムの影の中にあつたことは、忘れられるべきではないだろう。

注

- 1) パウンドの能と漢詩の翻訳の経緯を記述した文献は多いが、ここでは Kodama, *American Poetry*、Miyake および児玉を挙げておく。
- 2) パウンドの著作、書簡からの引証に際しては、以下の略語を用いる。
C: *The Cantos of Ezra Pound*.
EPJ: *Ezra Pound & Japan: Letters & Essays* (Ed. Kodama).
GK: *Guide to Kulchure*.
LE: *Literary Essays of Ezra Pound*.
PPCP: *Ezra Pound's Poetry and Prose: Contributions to Periodicals*.
- 3) 文献中の Nagahata を参照のこと。
- 4) 本稿では採り上げないが、*The Cantos* における能への言及、能のスタイルによ

る上演を念頭に書かれたとされる 1954 年の翻訳劇 *Women of Trachis* についての研究も少なくない。それぞれの例として、前者については文献中の吉田を、後者については高橋・安川 5-42 を挙げておく。

- 5) *EPJ* には、パウンドから北園に宛てた書簡が 50 通、北園からパウンドに宛てた書簡が 34 通収録されている。
- 6) 1939 年当時のタイトルは *Japan Times & Mail*。1940 年に *Japan Times & Advertiser* に改称。本稿では便宜上、両者を指すタイトルとして *The Japan Times* を用いる。
- 7) タイトル、掲載日は *EPJ* に拠る。*PPCP* はファクシミリ版を掲載する。括弧内にそれぞれの掲載ページを記す。(本稿における *PPCP* からの引証は、該当する巻とページを挙げて示す。) 以下の議論では主として *EPJ* のテキストを用いることにする。
- 8) これらの記事および北園宛て書簡に見られるパウンドの政治的姿勢については、稿を改める。
- 9) 1939 年 3 月 3 日付北園宛書簡でも、パウンドは同様の主張を展開している (*EPJ* 72)。
- 10) パウンドは “Notes on Micro-Photography” という短いエッセイ (*Globe* 誌 [Apr./May 1938] 掲載) で、イタリアのコモの月刊誌 *Broletto* が「マイクロフォト」化されたヴィヴァルディの協奏曲の楽譜をハーフトーンの縮小版で掲載したことを紹介し、マイクロフィルム技術の効能を説いている (*PPCP* 7.313)。1938 年 5 月 14 日付の北園宛書簡では、東京大学と日本政府なら Argus 社製のマイクロフィルム・リーダー＝プロジェクターを購入することができるはずだと書いている (*EPJ* 64)。これより後、北園に宛てた 1941 年 3 月 25 日付の書簡では、さらに、太平洋の平和のため、アメリカがグアムを譲渡する代わりに、300 点の能の実演を音声付きフィルムに記録して、教養を得る能力のあるアメリカの学生たちを教育するために利用できるようにする “EDUCATE such amerikn stewdents as are capable of being cultur'd” という提案さえしている (*EPJ* 112)。GK 147-148 も参照のこと。
- 11) 1934 年に外務省と文部省所轄下に設立された財団法人。国際文化振興会については、文献中の芝崎を参照のこと。
- 12) 図版は Yale Collection of American Literature, Beinecke Rare Book and Manuscript Library より (Image ID: 3748803)。Kodama, *American Literature* 63-69 も参照のこと。

と。漢字および英文の注はおそらく有賀執筆のものであろう。

- 13) 1940年8月25日付北園宛書簡でも、パウンドは、“Wish someone wd. get on with bilingual edition of the INTERESTING books of the orient/ meaning Japan and China” (EPJ 93) と書いている。
- 14) パウンドが、漢字にダイナミズムを見たフェノロサの漢字論に魅了されたこととの関連も無視できないが、文字そのものを見なければ、漢字のダイナミズムに触れることもできないはずである。フェノロサの漢字論とパウンドの詩論の関係については、文献中の長畑を参照のこと。
- 15) Xie はこの種の翻訳を “Pound’s method of a *heuristic* translation” と呼ぶ (207)。「解釈的翻訳」の勧めは、能の翻訳に際しての Mary Fenollosa の言葉にも見える。1913年11月25日付のパウンド宛て書簡で、彼女は、“What I am hoping is that you will become really interested in the material, absorb it in your own way, and then make practically new translations from the Japanese text as rendered into Romaji” と書いている (EPJ 8)。

文献

- Carpenter, Humphrey. *A Serious Character: The Life of Ezra Pound*. New York: Houghton Mifflin, 1988.
- Kodama, Sanehide. *American Poetry and Japanese Culture*. Hamden, CT: Archon, 1984.
- _____, ed. *Ezra Pound & Japan: Letters & Essays*. Redding Ridge, CT: Black Swan, 1987.
- 児玉実英 『アメリカのジャポニズム 美術・工芸を超えた日本志向』中公新書、1995.
- Miyake, Akiko. “Ezra Pound and Noh.” *A Guide to Ezra Pound and Ernest Fenollosa’s Classic Noh Theatre of Japan*. Ed. Akiko Miyake, Sanehide Kodama and Nicholas Teele. Orono, ME: National Poetry Foundation/University of Maine, 1994. xvii-lv.
- Nagahata, Akitoshi. “Pound’s Reception of Noh Reconsidered: The Image and the Voice.” *Ezra Pound, Language and Persona (Quarderni di Palazzo Serra 15)*. Ed. Massimo Bacigalupo and William Pratt. Genova: Università degli Studi di Genova, 2008. 113-125.
- 長畑明利 「併置と力 パウンドの「漢字的抽象」」 *Ezra Pound Review* 3 (2000): 1-14.
- Pound, Ezra. *The Cantos of Ezra Pound*. New York: New Directions, 1995.
- _____. *Ezra Pound’s Poetry and Prose: Contributions to Periodicals*. 10 vols. Ed. Lea Baechler,

- A. Walton Litz and James Longenbach. New York: Garland, 1991.
- _____. *Guide to Kulchur*. 1938; New York: New Directions, 1970.
- _____. *Literary Essays of Ezra Pound*. New York: New Directions, 1968.
- 芝崎厚士 『近代日本と国際文化交流 国際文化振興会の創設と展開』 有信堂、1999.
- 高橋美帆・安川慶治（編訳）『エズラ・パウンド版 トラキスの女たち』 英宝社、2009.
- 多和田葉子 『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』 岩波書店、2003.
- Xie, Ming. "Pound as Translator." *The Cambridge Companion to Ezra Pound*. Ed. Ira B. Nadel. Cambridge, UK: Cambridge UP, 1999. 204-223.
- 吉田幸子 「『羽衣』と *The Cantos* Pound の paradise の一断片」 『エズラ・パウンド研究 エズラ・パウンド生誕百年記念論文集』 福田陸太郎・安川昱（編）. 山口書店、1986. 169-186.